

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
16

振興協議会だより

[発行日] 平成27年12月21日
[発行] 苗場山麓ジオパーク推進室
[お問い合わせ] 025-765-1600

全国大会にて認定証を授与されました！

日本ジオパーク霧島大会2015は、10月27～29日の3日間、鹿児島県霧島市で開催されました。前日26日は、事務局会議と専門セクション討議が開催されました。事務局会議では、世界ジオパークがユネスコにおける正式プログラムに組み込まれ、世界遺産と同列に扱われる可能性が報告されました。特に正式決定における世界条約批准を踏まえ、保存活用の議論が高まることが指摘されました。また、専門セクション1では、「ジオパークの保存問題」が扱われ、法規制下にあるジオサイトと法規制の範疇にないジオサイトの対処の違いやジオパーク範囲における鉱山開発や鉱物販売問題などが議論されました。一方、専門セクション2では、ジオパーク学習のカリキュラムの組み方や体験学習の内容、さらには運営について多面的な課題の抽出と課題解決の議論が展開しました。

27日が正式の大会であり、日本ジオパーク登録に伴う認定証授与式が行われました。苗場山麓ジオパークは36番目の日本ジオパークとして紹介された後、上村憲司振興協議会長が壇上に上がり、日本ジオパーク委員会副委員長：中田節也氏から認定証が授与されました。



会場周辺にはテント村が設営され、霧島市近傍の安全で安心な食材と食料、お土産が一堂に販売され、多くの来訪者で盛況でした。さらに、ポスターセッションブースでは、各ジオパークが趣向を凝らし、各々のジオパークの魅力や特色を伝え、観光ビジネスへの可能性を全面的に表現していました。夜には、歓迎レセプションが催され、九面太鼓が幽玄で神秘的な踊りと演奏で全国から来訪したジオパーク関係者を歓迎してくれました。そして、司会のできる公務員、霧島ジオパーク担当職員のテンポある司会で楽しい歓迎レセプションを過ごすことが出来ました。

27日の午後と28日の午前中は、首長セクション、保全・保護セクション、ジオ学習セクションなどに分かれ、互いに研鑽を積むワークショップが展開されました。午後には閉会式がしめやかに楽しく行われ、来年度総会開催地である伊豆半島ジオパークが紹介され、声高らかに来年の再会を期待して幕を閉じました。

番外では、霧島市内のお座敷で気の利く地元の女性との出会いがあり、男共全員が心を温かく、頬を緩め、美味しいお酒を飲み尽くしました。焼酎の町に出向き、越後の日本酒を飲みあげた私たちは、きっと記憶に残った変わり者だったでしょう。酒と彼女に酔いしれた某さんは、帽子を忘れ、それをホテルまで彼女が笑顔で届けてくれ、さわやかで微笑ましい思い出を霧島大会で作ることが出来ました。



第6回振興協議会総会



12月1日に第6回総会が開催されました。平成27年度活動報告では、スライドを使用して展望台建設や解説板設置などのハード整備やパンフレットや英語版ジオサイトマップの作成などのソフト整備、さらにはガイド養成や展示・講演・視察対応などを報告しました。また、防災担当者の栗駒山麓ジオパーク視察の報告は、防災施設や防災学習の先進地域から学んだ視点が報告され、これからの取り組みが期待されました。資源探査部会では、柴村の仙当城跡や常慶院、硫黄沢の炭酸水や月夜立岩などの調査や、津南町では船山新田から見玉までの範囲を核整備地区と位置付け、その構想案と構想図案が提示されました。広報部会は「秋山郷ジオサイトフォトコンテスト」の開催、商品開発部会ではジオツアー商品の多面的な取り組みが報告されました。また、ガイド部会の設置や新しく委員の着任を承認頂きました。さらに平成28年度事業計画とそれを背景とした予算案を討議頂き承認を得ました。

中部ブロック大会が白山手取川ジオパークで開催されました 認定ガイド 高橋一彦

11月17、18日と石川県白山市鶴来において第3回日本ジオパーク中部ブロック大会が開催されました。1日目は鶴来公民館を会場とし第1部各ジオパークの取組み状況報告、第2部課題解決と題し、8グループに分かれてのグループディスカッションが行われ参加各ジオパークから活発な意見発言、意見交換が行われ各ジオパークの状況とジオパークの今後の有り方を実際に目で見て聞いて考えることができる実のある会議となりました。その後開催事務局、ガイドの皆さん、参加ジオパークの皆さんとの交流会が行われ新しい繋がりを築くことも出来ました。

2日目は実際のコースを使っの、ジオツアーが行われ地元ガイドの皆さんと特色あるツアーを体験することができ、実際のガイド活動の楽しさ、難しさ、問題点などを共有する事ができ、今後のガイド活動において何をやっていかなくてはならないか！をあらためて考えさせられる良い体験となりました。開催地である白山手取川ジオパークの皆さん、白山市の皆さん、白山市ボランティアガイド協会の皆さんありがとうございました。



「北陸の大地で考えるジオパークフォーラム」に参加して 栄村ジオパーク推進係 高藤和幸

標高3,000mの立山連峰から富山湾にかけての広大なエリアを持つ立山黒部ジオパークの富山県民会館で開催されたフォーラムに参加しました。

午前は「地域の特性である自然を活かした婚活」と題し、山梨県八ヶ岳山麓で様々な体験型婚活イベントを企画開催している五味愛美氏の講演がありました。登山やカヤック、そば打ちや収穫体験などアウトドアでの体験イベントに30～40代の未婚男女を募集し、交流の輪を広げていく活動で県内外から多くの参加者が集まっているとのこと、ジオサイトを活用してこうした体験型イベントもできるのではないかと提案でした。

午後の部では「ツーリズム・観光」をテーマに、糸魚川・恐竜渓谷ふくい勝山・白山手取川・佐渡・苗場山麓のそれぞれのジオパークで行っているジオツアーの紹介と悩みなどの発表があり、ツアー等を計画・実施しているがなかなか申し込みがない、リピーターの増加につながっていないなど苦慮している話もありました。

北陸に位置するジオパークとして、気候や交通インフラなどの共通する特徴や問題をかかえる中でのジオパークとツーリズムにおけるそれぞれの悩みが共有できたように感じました。



絵解きジオパーク イラスト:鈴木夏海



スノーシューを履いて何を見ているのかな？

苗場山のビューポイント前倉展望台

前倉のトドに展望台が整備されました。苗場山と大赤沢集落、中津川のV字渓谷が一望できるすばらしい展望台です。

場所は、妙法牧場から鳥甲牧場へ向かう際に前倉へ下りる道路との分岐点から100mくらい行ったところに展望台入口と駐車スペースがあります。入口から50mほど歩くとウッドデッキの展望台があります。

晴れた日の眺めは絶景です！

皆さん、ぜひ足を運んでみてください。



苗場山麓ジオパークのジオサイト

57の見どころを随時紹介していきます

苗場山と伊米神社(日本百名山・花の百名山)



所在地 津南町・栄村 種別 地質・文化

苗場山は、約30万年前に形成された成層火山で、大きく4つの噴出時期がありました。苗場山頂は火山全体の中で南方に位置していて、溶岩や火砕流の大部分は北側に流れくだっており、緩やかな長い裾野となっています。第II期の噴出物は、約13km北に流れ下り中津川を超えて高野山、天上山まで達しました。

鈴木牧之は登山し「絶頂一里、千勝万景」と『苗場山記行』の中で絶賛しています。

その平坦な山頂は第IV期の溶岩台地で、約700haに及ぶ高層湿原が広がっています。山頂がこのような平坦な山は日本ではめずらしく、そこには約6,000の池塘が点在しています。この池塘は、近年の堆積物調査により、約7,000年前から形成が始まったものと考えられ、その背景に多雪化があると推測されます。

さらに、池塘は田んぼのように見えることから「神の苗代田」とも呼ばれ、山頂には平安時代の延喜式神社である「伊米神社」が建立されました。農耕の神様として祀られ、参拝登山されてきた歴史があります。

ちとう
池塘・・・高層湿原が形成される過程で、堆積した泥炭層の隙間に、降水が自然にゆっくりと満たされてできた箇所。小さな池のように見えます。

小滝四ツ廻りの運河跡



所在地 栄村小滝 種別 文化

江戸時代、幕府は信越天領米の輸送や飢饉の時の救援物資の輸送など、千曲川における通船の利用価値に期待を寄せていました。当時の物流において、船が果たす役割は大きなものでしたが、市河谷にある小滝の四ツ廻りなど船の難所も多く、通船の計画はなかなか実現しませんでした。

文政11年(1828)、善光寺町(現・長野県長野市)に住む商人・小野厚連が掘削を出願し、同年には工事が開始されます。厚連は、江戸から石割りのできる黒鍬者(技術者)を呼び寄せたそうですが、川の中の大きな石を砕くのは難工事だったようです。途中の中断はあったものの、10年後の天保9年(1838)に岩石堀割普請が完成しました。

積荷は、下りの船では絞りたばこや胡麻油、糊入紙や木綿布など、上りの船では五泉茶や村上茶、塩や海産物や魚類、瀬戸物類などであったと記録が残っています。

弘化4年(1847)の善光寺地震で千曲川は川筋が変わり、堀割は使用できなくなりましたが、復旧工事が行われ、千曲川・信濃川での通船は続いたとされます。

現在でも四ツ廻りの川原では、掘割斜面に掘られた上り船を押しするための足掛け穴や、十字状に楔孔が残る円礫を見ることができます。

※地質学の学説は複数あり、現在も研究が続いています。そして、本地域の調査研究がこれからも行われる必要があります。

ガイドの会発足

今年4月、38人の認定ガイドが誕生し、活躍が期待されるようになりました。そこで、以前この紙面でも報告しましたが、6月22日にガイドのつどいを開催しました。その中で自己紹介と各人の興味・関心などを受け、7月29日に両町村の観光部局とジオパーク推進室で打合せを行い、ガイドの運用案が提案されました。ガイド依頼の受付は津南町観光協会で担うこととし、ガイド料やモデルコース案も示されました。その後10月19日にガイドの会開設のための準備会を行いました。そこで、ガイドの全体会開催と規約が必要であるということになり、11月16日、第1回ガイドの会を開催する運びになりました。ガイドの会代表に小島隆夫さん、副代表に中澤謙吾さんが選出されました。入会の意思表示を確認する入会届を出す、総会を実施する、等々の確認を行いました。ガイドの会は、振興協議会の外郭団体として、ガイド活動の重要な推進力になることが期待されます。



栗駒山麓ジオパーク視察



平成27年11月24日（火）、協議会事務局職員2名と、津南町と栄村の防災担当職員2名の計4名にて、今年認定されたばかりの宮城県の北部、岩手県との県境にある栗駒山麓ジオパークへ行き、担当職員、地域おこし協力隊の専門員、地元ガイド、消防署職員の案内で防災学習の取り組みを学んできました。

栗駒山麓ジオパークは、平成20年に発生した岩手・宮城内陸地震を契機に震災を伝えていくために5年前からジオパーク活動を始められています。

エリア内の消防本部には、防災学習センターがあり地震や火災時の煙を体験できる施設があり、小中学校でも学年ごとのテーマに沿ったジオ学習と災害について伝え、さらに現在制作中の小中学生向けの「防災ジオ読本」とともに、災害を風化させない防災学習を展開しています。

そして、四か国語表記の解説板や岩石標本、スケッチブックを巧みに使いながら解説する認定ジオガイドから荒砥沢地すべり現場などのジオサイトを案内頂きました。

何より印象に残ったのは、地震によってひび割れた道路、倒れた電柱が7年前のまま震災遺構として残され、防災学習の1つとして利活用され、当時の震災の大きさを感じ、発生のメカニズムを科学的に知ることができたことでした。

山歩きで気をつけたいこと

新潟県自然環境保護員 中沢英正



春から秋にかけての山歩きは、それぞれに風情があって楽しいものです。ただ、楽しい中にも守ったり注意したりしなければならないことがあります。

まずコースからむやみに外れないことです。特に木道が敷設されているような湿原は踏みつけに弱く、大勢が入り込むことによって環境を破壊してしまうことになりかねません。草本を折ったり、掘り採ったりすることもやめましょう。国立・国定公園内や県自然保公園などでの採取は、処罰の対象となることもあります。野に咲く花をきれいと感じるのは、野にあってこそなのです。

森の中では頭上に注意することが必要となります。枯木が折れたり、枯枝が落ちてきたりする可能性があるからです。大きなかたまりだとケガにつながることになりかねません。野外では風や水の流れ、昆虫の羽音や小鳥の声など、いろいろな音が聞こえてきます。中には落石や土砂の崩落など、危険を伴う音もあります。

また、どこからともなく獣の匂いが漂ってくる場合があります。これは近くにツキノワグマやニホンカモシカといった大型の動物が潜んでいる可能性があります。

音を出したりしてこちらの存在を知らせることが大切です。自然の中では「見る・聴く・嗅ぐ」といった感覚をフルに活用することを心掛けてください。

絵解きジオパーク その答えは

苗場山麓ジオパークでは四季を通じてジオツアーを開催しています。3月の残雪期はスノーシューを履いて、春芽や獣の足跡、ときにはウンコを観察しながらスノートレッキングができます。ここはジオサイト14の石落しが見えるビューポイントで、雪をかぶる柱状節理を観察している様子です。「石落し」の地名は、残雪期に柱状節理の岩が崩れ落ちぶつかり、その音が中津川渓谷に響くことに由来します。苗場山麓に早春を告げる風物詩です。